



原発事故から10年 被曝の現実是不変

東日本大震災・原発事故から10年、「3・11 反原発福島行動'21」が開催されました。直前の地震で会場が変更になり、しかもコロナ禍でもあり、感染対策をとっての集会となりました。集会を開くかどうかの議論から始まりましたが、「事故をなかったことにしようとする」動向が加速され、他の企画が軒並み中止されているなかで、あくまで集会の可能性を追求するという決断でした。

内容としても、福島への怒り、福島の生活を中心に構成されました。トークセッションは佐藤幸子代表をコーディネーターとして、元いたてふあーむ管理人の伊藤延由さん、写真家の飛田晋秀さんが登壇し、新地町の医師、渡辺瑞也さんは体調不良で来られませんでした。メッセージをふくしま共同診療所院長の布施幸彦さんが代読しました。

伊藤さんは、「原発構内の基準は100ベクレル/kgなのに、福島では市民が住んでいるところは8000ベクレル/kgです。原発は現在の人智では

制御不能なプラントです」と訴え、持参されたキノコに線量計を当てて、いまだに深刻な放射能汚染をアピールされました。

飛田さんは、小学2年生に「私は大きくなったらお嫁さんに行けますか」と問われたショックを紹介し、もともと職人の写真を主としていたところから、被災地を記録することに全力をあげはじめた経験を語られました。なお、近くの別会場では飛田さんの写真と「希望の牧場」の写真展が開かれました。

渡辺さんのメッセージでは、「福島やその周辺では放射線による健康異変がいよいよ明確になりつつあります。他の原因が特定できない場合は暫定的に『放射線被曝症候群の疑い』という臨床概念で長期に経過観察すべきです。広島では75年も経て内部被曝を認められました。福島のたたかきもこれからです」と提起されました。

地元、福島からはさらに吉沢正巳さん（希望の牧場）、佐藤美香さん（脱被ばく子ども裁判原告）のアピールや、「ふるさとを返せ・津島原発訴訟」原告からの手紙の紹介が行われ、広島からは、保科衣羽さんから「黒い雨」裁判の特別報告が行われました。



検討委員会で議論もなしに 学校検査縮小へ動く環境省

5月17日に開かれた県民健康調査検討委員会は、事故後10年で、甲状腺検査の縮小に向かって大きく舵を切りました。委員会はリモートで開催されましたが縮小の方向をリードしたのが環境省（政府）だった様子は際だっていました。

実は、これまで同意書の提出が遅れている家庭からの同意書の回収を学校が肩代わりしていました。その学校での回収を、環境省の横やりで3月末で終了してしまっていました。その結果、事前に自分で福島医大に同意書を提出した子どもだけが検査を受けられることになり、検査数が大幅に減ることが予想されます。そのことで児童・生徒の甲状腺がんの早期発見が妨げられるばかりか、検査の疫学調査としての意味が失われてしまいます。これでは、発生が通常の何十倍になろうと、「それは通常のがんだ、個人の責任だ」ということにされてしまうことになります。

広島の「黒い雨」裁判では、75年たって内部被ばくが認められましたが、福島では将来の同じリスクを回避しようとする政府の狙いが伺われます。

これまでも環境省（政府）の主導のもと「学校検診が強制になっているのではないか」「過剰診断ではないか」などと議論され、星座長がそれを

受け入れる構造で進められてきました。そのために、前回の検討委員会に向けては26校の学校から、今回に向けては高校生3人と保護者6人からのヒアリングを行ったものの、いずれも政府の意向とは逆に学校検診の継続を求める回答ばかりでした。

これに対して、環境省は「デメリットが理解されていない」から、今後それを強調すべきだと逆転した発言をしています。環境省として「デメリットを明記した」リーフレットまで発行することを決めました。

しかも同意書回収への学校の協力を停止する措置を、検討委員会開催の前に実施していたのです。検討委員会の意見も聞かず、ヒアリングとも無関係に強行的に検査縮小するとは何たることでしょうか。

今回の検討委員会では、新たな甲状腺がん（疑いを含む）が5人、これまでの合計で256人だと発表されました。しかし、直前の甲状腺評価部会で福島県「がん登録」から明らかになった「枠外で24人いる」という指摘が無視されました。うち21人は「B判定から保険診療に回され」ていた、つまり隠されていた人たちです。これは検討委員会にとって決して「他人事」ではないはずですが。

甲状腺がん検査「継続望む」9割
NPOアンケート

東京電力福島第1原発事故後に甲状腺がんが診断された子どもを支援するNPO法人「3・11甲状腺がん子ども基金」は31日、甲状腺がんが診断された県内の患者やその家族計70人にアンケートした結果、学校での甲状腺検査の継続を望む声が約9割に上ったと発表した。同日、オンラインで開いた記者会見で明らかにした。

学校検査の継続を望む人からは「任意検査では受け手が確実に減ってしまう」などの意見が寄せられたという。記者会見には、甲状腺がんの診断を受け、17歳で甲状腺の半摘手術を受けた県内の小学2年生の林竜平さん(21)が参加。事故当時、福島市の小学4年生だったという林さんは「検査縮小の議論もあるが反対。当事者の声を発信する場をつくってほしい」と訴えた。(6・1福島民友)